

米国科学・工学・医学アカデミー、卵巣がんの早期発見・治療向上に向けた
研究の必要性を提言（3月2日）

米国科学・工学・医学アカデミー（National Academies of Sciences, Engineering, and Medicine）は、卵巣がん研究に関する科学動向委員会（Committee on the State of the Science in Ovarian Cancer Research）が議会からの指示を受けて作成した報告書「卵巣がん ～研究・治療において進化するパラダイム～（Ovarian Cancers: Evolving Paradigms in Research and Care）」を発表した。本報告書は、卵巣がんの多くは、卵管などといった卵巣以外の組織や卵巣に内在するとは考えられていない細胞から発症することが示唆されていることから、卵巣がんを単一の疾病として分類するのではなく、卵巣に関連する異なるがんの集まりとして捉えるべきであると提言している。また、5年間の生存率は1975年～1977年の36%から2005年～2007年には46%に向上しているものの、黒人女性では同期間に42%から36%に低下していることや、卵巣がんは自覚症状がないため早期発見が難しく、有効な検査手段がないことから、多臓器にもがんが転移した、かなり進行した段階で発見された患者の場合は5年間の生存率が30%未満となっていることにも言及した。同委員会は、研究者及び研究資金助成機関に対し、異なる卵巣がんの亜型を考慮に入れるために研究課題の計画・優先順位付けをし、細胞起源と疾病の発症の仕方の特定を最優先研究課題とすべきであると提案している。

なお、本報告書は、<<http://www.nap.edu/read/21841/chapter/1>>から閲覧可能。

National Academies of Sciences, Engineering, and Medicine, New Report Finds ‘Surprising Gaps’ in Knowledge of Ovarian Cancers; Better Understanding Needed to Make Progress in Prevention, Early Detection, Treatment, and Management of Disease
<http://www8.nationalacademies.org/onpinews/newsitem.aspx?RecordID=21841>